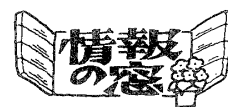


日本OR学会創立40周年記念  
東北支部シンポジウム ルポ



山田 孝子 (山形大学)

日本OR学会創立40周年(東北支部30周年)記念シンポジウムが去る10月17日、仙台の東北電力株式会社連坊電算センターで開催されました。

当日の仙台は、穏やかな晴天に恵まれ、遠くの峰々が紅葉に染まり出す時期でもあり、およそ170人の参加者たちが集まり、OR学会として40周年、また学会の東北支部としても創立から30周年という節目を記念するにふさわしい、内容、雰囲気のものでした。

以下、シンポジウムの内容について、簡単にご紹介します。今回のシンポジウムは大きくⅢ部から構成されていました。第Ⅰ部、創立40周年記念式典は石川明彦先生(岩手大学)の司会のもと、刀根薫会長の挨拶で始まりました。刀根会長は、現在3000名の会員を擁するに至った日本OR学会の設立から現在に至る歴史を簡単に紹介され、今後もOR学会の自由で独立した雰囲気を大切に、今日のOR的問題に寄与していきたい、と挨拶されました。続いて、松田東北支部長(東北電力)から、約100名の会員数となった東北支部についての紹介と挨拶がありました。

次に「日本OR学会長期計画ビジョン」と題して、梅沢長期計画委員会委員長から、「創立40周年記念長期計画」の報告がありました。梅沢委員長は、個性豊かな長期計画委員が交わす議論の応酬から長期計画が作成されたことを、感想を交えながら披露されました。

第Ⅰ部の最後は山本保東北支部副支部長による、支部創立30周年を迎えた東北支部活動概況についての報告でした。

東北支部では定例総会、運営委員会、幹事会以外に支部独自の研究会が68回、講演会50回が行われ、OR講座18回を含め、正確にわかっているだけでも延べ136回に及ぶ独自の活動をこれまで行っていることが最初に述べられました。さらに、その中には外国の研究者による講演も含まれ、東北支部の活動がオープンなものであることを特色としてあげられました。支部は東北地域内企業、県、市などの問題解決にも協力し、企業や地域社会への積極的貢献に加え、現在の東北支部の構成も会員数102名・賛助会員8社であり、発足時



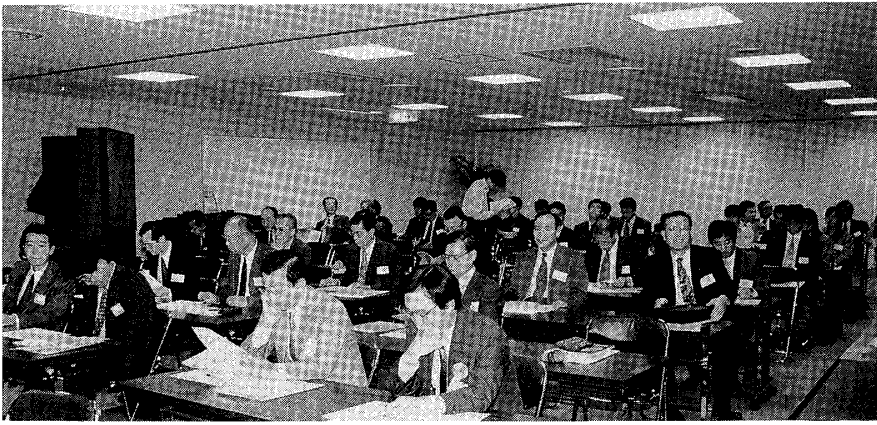
松田東北支部長挨拶

の80名から、徐々にではありますが増えてきているという、よろこばしい内容でした。今後の活動としては、平成10年度に仙台での開催が決定している春季研究発表会が目下最大の課題であり、松田支部長を実行委員長とする実行委員会のもと、計画がすすめられていることも報告されました。

第Ⅱ部では「ORの新潮流報告」ということで、刀根会長より「経営の科学としての新潮流」というタイトルで、過去から現在まで、ORの分野でどのような研究が行われてきたか、その時代背景とともに歴史が解説されました。刀根先生は途中、上着を脱ぎながらスクリーンの前で、日本では創造性に対し、もっと対価が支払われるべきであることを強調され、経営の科学であるORは知のインフラであり、独創性の展開力、実現力の3つが大切であること、などを語られました。刀根先生のお話は、いつもながら明快で、タイムリーな話題も盛り込まれ、たいへん興味深い内容でした。おそらく学生や一般の参加者の方たちには、ORという分野全般を展望するのに役に立つ内容だったのではないのでしょうか。

第Ⅱ部のあと、15分の休憩で一息いれたせいでしょうか、参加者たちが用意された飲み物などを手になごやかに談笑する姿があちこちでみられました。会場の雰囲気もそれまでのひきしまったセレモニー的な雰囲気から、リラックスしたところで、第Ⅲ部が始まりました。

第Ⅲ部は、東北アステル株式会社社長の鈴木宏輔氏



講演会会場

の司会で、社団法人東北経済連合会顧問、黒田四郎氏による特別講演「人生において大切な事」でした。まず鈴木氏より、黒田氏との出会いのエピソードと黒田氏が出版され、たいへん好評を博している著書「東北見聞録」について、ユーモアに満ちた紹介がありました。

黒田氏は「こんばんは」という挨拶が東北では「おばんです」という言葉になる話を皮切りに、これまでの経験を踏まえて考えられた、人生において大切なこと、「生きがい」、「好奇心を旺盛にする」、「仲間を作る」、「笑う」、「感動する」、「意識の変革」を順に挙げながら、話をすすめられました。

「生きがい」では、黒田氏ご自身の趣味である「名前の由来調べ」から、古来、「みちのく」と呼ばれた東北の地の名前の変遷を紹介されました。東北地方が奈良時代には「みちのく～道の奥」であり、戦国時代、豊臣秀吉の小田原攻めでは「未知の奥」へと意味が変わったこと。さらに現代ではインテリジェントコスモス構想など数々の開発プロジェクトと共に、文字どおり先端産業、技術が発展し、「未知が退く」という意味で継承されているそうです。黒田氏は、ご自身の趣味をとおして生き甲斐や趣味が人生にとっていかに大

切なものか、について語られました。

また、最後の締めくくりでは、今後は地球環境の悪化、精神の荒廃といった問題に必死になって対処していく世紀になる、という見方を述べられ、OR学会では現在、日本を覆っている家族、家庭を犠牲にしながら働き続けるシステムとそれによる精神の空白をうめるような研究ができてきているのか、という重い課題を示されました。

黒田氏は1時間20分という時間、流れるようなテンポでよどみなく話を進められ、1つ1つに納得したり、我が身を振り返ったりしているうちに、あっと言う間に時間がたってしまった、というのが聞いていた私の実感です。いかに人生を生きるべきか、というたいへん重要な問題を、日頃あまり考えることなく過ごしがちな者として、自分の日常を問い直すきっかけとなったように思います。

この後さらに場所を移して、立食形式の懇親会がありました。記念シンポジウムが成功裡に終わったこともあり、東北支部の会員一同をはじめ、出席者もくつろいだ雰囲気の中で懇談し、和気あいあいのうちに幕となりました。アルコールを片手に平成10年度春季研究発表会を控えた情報交換の場としても、たいへん役にたったのではないのでしょうか。

最後になりますが、今回の記念シンポジウムに遠路、参加していただきました多くの参加者の方々、報告をいただきました来賓、講師の諸先生方に、心から感謝いたします。また、多忙にもかかわらず快くご協力いただきました協賛企業、学会、団体の方々にも感謝いたします。